

〔書言字考節用集九〕言九辭コ、ロ、ダ意シ氣キ

氣象同資性同氣質コ、ロ、ムケ

〔書言字考節用集九〕言九辭シ、シ、ク心底シ、ク

〔倭訓栞前編九〕古こ、ろのそこ

日本紀に丹款をよめり、赤心の意をもて、心底と訓せり、心底の字

は謝適が辭に見えたり

〔伊勢物語上〕むかしみちの國にて、なでふことなき人のめにかよひけるに、あやしうさやうにて

有べき女とも、あらず見えければ、

忍ぶ山しのびてかよふ道もがな人の心のおくも見るべく

〔倭訓栞前編九〕古こ、ろのくま 心の曲也、詩に辭我心曲と見えたり、

〔權中納言兼輔卿集〕伊勢の齋宮にまいりて歸る比は、やうしりたる女のもとより、

人はかる心のくまはきたなくて清きなごさにいかで行けん

〔書言字考節用集九〕言九辭シ、シ、ク心緒シ、シ、ク

〔倭訓栞中編八〕古こ、ろのをろ 萬葉集に見ゆ、心の緒也、ろは助語也、

〔萬葉集十歌四〕東十相聞

麻可奈思マカナシ美奴禮婆ミヌレバ許登爾豆コトニツ佐禰奈敵サメナトク波己許呂乃緒ハニコロノ訓爾能里氏ノリノ可奈思母カナシモ

〔倭訓栞中編八〕古こ、ろのつま 心の爪也、端緒をいふ也、

〔宇治拾遺物語十五〕十五そのかへさ、茂祭賀法性寺殿藤原紫野にて御覽じけるに、中今一度北へわ

たれと仰ありければ、また北へわたりぬ、中このたびは兼行さきに南へわたりぬ、次に武正わ

たらんずらんと、人々まつほどに、武正や、久しくみえず、こはいかにとおもふほどに、むかひに

引たる幔より東をわたるなりけり、いかにく、とまちけるに、幔より冠のこじばかりみえて、南

へわたるけるを、人々なをすぢなきもの、心ぎはなりとほめけりとか、